# 新年の感慨

<< 作成日時 : 2011/01/03 01:04 >>

2011年1月2日

**あけましておめでとうございます**

昨年の一年間、色々なことを考え行動してきたとは思いますが、胸に手を当ててつらつら考えてみるに、自分は本当に何を考え何を目安に行動して来たのかと思うことしきりです。

極端に言えば、何も考えず目立った行動はしなくても、人は生きて行けると思ってしまうのです。

ただ生きているだけで時間は過ぎ去り死を迎えることが出来ます。

我々は誕生することによって、これこれしかじかのことを成し遂げなければならない、と決められている訳ではないのですから、唯々諾々と死ぬまで生きることに意

義を差し挟む権利と義務は、何もないと断言することが出来ます。何せ、望んでこの世に生まれてきたわけではない訳ですから。

しかしながら、この世に存在させられた以上、いき続けなければならないように世の中の仕組みが成り立っているようなのです。その仕組みに従って、私たちは生きるためにあくせくと仕事をし、仕組みの中で悩んだり怒ったり喜んだりしながら死へ向って突き進んでいることになるわけです。

そうした仕組みに疑問を持って自らの生を絶つことの出来る人は、一つの強い意思の表れということが出来ます。自分の意志で生まれたのではないのですから、その生を自分の意志で閉じるということに誰が反対できるでしょうか？

ところが、人間というのは社会生活を営む生き物であり、なおかつ意志や感情という脳髄の働きによって他人に自らの存在を認識させ、記憶に刻み込むことを余儀なくさせられる存在でもあるわけです。つまり、自らの自由な感情や意志だけで行動することが難しくなっているのです。

それを敢えて行えば、自分の周囲の人たちが悲しんだり傷付いたり絶望したりするかもしれない、と考える想像力という厄介な思考の広がりを有しているわけです。だから、死にたいと思ったりこの世から突然消えてしまいたいと思っても、つい躊躇してしまうのです。

それでも、この世に生を受けた以上何故生き続けなければならないのか、という根源的な問いの答えとなってはいません。それは生きるために何故物を食べなければならないのか、という自問にも重なってきます。食べなければ、腹が減って生き続けることが出来ないからですが、そのこと自体不条理なことではないでしょう

か？

毎日何がしかの食物を口にするために、苦しく辛く腹立たしい労働を否応なく続けているわけです。

何故生き続けなければならないのか、と問い続けると、このような重苦しい結末に辿り着かざるを得ないのですが、一方で、生きることが楽しくて仕方がないと思う人もすくなからず居るはずです。

苦悩や悲しみや不安や絶望は生には付き物であって、生きる喜びや楽しさを凌駕するものではないと考えることが出来る上は。

というより、生きている全ての人はこう考えざるを得ないのです。

幸いに私たちの記憶は時と共に薄れるという性質を持っているようです。最愛の人と死別するような事態と直面して絶望的な気分になっても、時が経てば絶望は次第に癒されてくるという精神の仕組みになっているのです。絶望から癒されるためには耐えなければなりません。耐えることによって時の膏薬は傷を癒してくれるのです。

ひたすらに耐えよ、とこの夜の思考は私に結論を迫ります。

＜忍耐＞ということの濃密な時空を我が今年のテーマに掲げ、とりあえずは精一杯生きてみようと思います。

# 詩と剣と津軽三味線

<< 作成日時 : 2011/01/16 15:51 >>

2011 年 1 月 10 日

新春早々ライブを行った。一風変わったライブというべきであろう。

唱え事をしながら剣を遣い津軽三味線が情景を煽る、という構図である。主催は「銀座森ギャラリー」、場所は荻窪の『with 遊』という小ホールである。

私は刀道と詩即興朗唱という二足の草鞋を履いており、刀道の演武と詩即興朗唱の公演は別のものとして使い分けてきた。しかし、同一人がやるのであるから何とか融合できないかと考えていた矢先でもあり、森和子さんから声がかかったことを好機として捉え、両者の融合の構想を森さんに伝えたのである。

叫び声ならまだしも朗唱しながら剣は遣えない。言葉の合間に剣を遣い音の助勢を得て言葉を発するのである。

その際、剣の動きをあらかじめ決めていたのでは言葉の自在さが失われるので、ただ試斬台に二本の藁を立てておき、そのときの気分と感情の動きで藁を斬るこ

とにしたのである。

つまり即興の試斬である。

30 名弱の観客を前にして、正月にふさわしく紋付袴に威儀を正し、帯に鉄扇と脇差を手挟み、大刀を帯びて人々の前に立つ。

そこで唱える項目を説明することにした。それは、私が主宰する文武両道塾の主要徳目である「仁　義　礼　智　信　勇」の六項目である。孔子の教えには「勇」が入っていないが、敢えて私が付け加えた。

今現代日本人は、人間育成の基本とも言うべき伝統的な徳目を見失っており、人間関係が乱れに乱れ、かつては尊属殺人ということで最も重い刑であった殺人が多発している。親が子を殺し子が親を殺すという眼を覆いたくなる記事が毎日のようにマスコミを賑わしている。

この人倫の乱れは何に、何処に起因するのか、そのところが見極められないでいる。民主主義(個人主義)を基本とする欧米文明の所産であり、日本人が永い間規範としていた儒教道徳の崩壊であることは疑いえない。

儒教道徳によって支配された封建主義が壊れ去ったのであるから、上に挙げた六つの道徳項目が取り去られるのはやむをえない、と思う人が居るかもしれないがそれは間違いである。

世の中が、民主主義になろうが自由主義になろうが個人主義になろうが、アナーキズム、共産主義になろうが、「仁義礼智信勇」は、人間が人間である限り崩れることが許されない、社会規範であり精神徳目であると私は思っている。

特に我国古来の伝統文化であり精神文化でもある日本剣術を習得しようとする人は、これらの徳目にことさらに敏感でなくてはならない。

私はそうしたことを簡略に説明し、各項目を区切って解説し、それが行われなっ

ている社会の悪弊愚鈍を斬るという形で剣を振るうことにした。

項目の解説は『論語』や解説書などに一切頼らない自分独自の解釈を押し通した。例えば次の如くである。

「仁　というのは、その人の身に備わった生き方の根本とでもいうべきものであるが、相対する相手や場所によって変化する雰囲気のようなものである。確とした生き方の拠って立つ規範であるが、実体はなく形もない。根源的なものは実態として差し出すことは出来ない。ただ気として存在する事によって相手に伝わり感化し影響を与える。」

そう唱えておいて、左右のどちらかにある藁を刀道の業を遣って斬るのである。

「義　というのは、仁義という二語によって表されるように、人と人の結び付きを固くする接着剤のようなものであり、その気持ちのあり方によって人を信じることができ、自らの生き方に輝きと目標を与えることができる。」

「礼　というのは、人間の最も基本的な日常の動作である。武道では、礼によって始まり礼によって終わる、ということを稽古の基本とするが、それは一般の日常生活においても変わりはない。礼こそが人間の尊厳ということを最も分かりやすい形で表しており、特に日本人の世界に誇る徳育であることを自覚するべきである。

礼は目下のものが目上の者に行うことを意味しない。目上の者が目下のものに対する礼もある。」

「智　ということにたいして誤解があってはならない。それは知識の智であると同時に人間の感情や心の在りかたも含んでいる。脳髄の全作用を含んだ意味で智ということを考えなければならない。

教養や知識や学問が人に秀でていても人情や感情の豊かさが認められないと、智の人とは言えないのである。」

「信　というのは、他人に対する信頼、気持ちの確信であるということと同時に、他人に気持ちを預けるということでもある。そうした気持ちへの応答があって初めて信という言葉が実りのあるものとなる。信があれば必ず応答があり日常生活を豊かで安らかなものにすることができる。」

「勇　というのは、現代では忘れつつある言葉である。勇というのは決して蛮勇であってはならない。それは見せるものでも示すものでもない。自らを犠牲にして他人を正し援けるという精神であり、最も崇高な行為である。」

第二部の冒頭は、山本竹勇さんの三味線独奏である。正調の津軽よされ節等を堪能できた。極めて正確な技術の持ち主であり、格調の高いものであった。

次は、私と二人での即興の掛け合いということで、私は客席から幾つか題を出してもらい、それらの言葉に基づいて言葉を発するという方法を選んだ。

空、コミュニケーション、宇宙、世界といった言葉があちこちから飛び交ってくる。そうした言葉を聴いているうちに構想が固まってくるのである。始まる前に竹勇さんに、「思いっきりどかどかやってください」と、観客に聞こえるように注文を出しておいた。

良く応えて下さった竹勇さんには終了後の握手で応えたのであった。

この最後の即興朗唱の際、紋付袴姿に真っ黒なサングラスをかけて登場したことに、違和感のあった人はおそらく居なかったと確信している。

（試斬朗唱の写真がないのでここには載せられませんが、ビデオからピックアップして後日掲載します。）

# 書と詩と歌と楽器のコラボレーション第二弾

<< 作成日時 : 2011/01/30 17:34 >>

2011 年 1 月 30 日

去る 27 日、新宿三丁目の「G's Bar」(ジーズバー)で一風変わったライブが行われた。

魂のギター中村ヨシミツさんの主催である。

昨年の暮れその第一弾が実施され、中村(ギター)、吉田(パーカッション)、山後(書)、佐土原(詩即興朗唱)の四人が出演した。客の集まりは今一といったところであったが、手答えは十分であり、そのときの手答えが比較的短い期間での第二弾のライブに繋がったものであろう。

今回の出演者はゲストを含めて 9 名という多さである。

大きなステージのある会場ならともかく、詰め込んでも 20 数名という小さなバーで行われるライブである。主催の中村ヨシミツさんの挨拶では、客より出演者の方が多いライブになるのではないかと思っていた、という冗談めかした本音を

ふと洩らしたほどである。

しかし彼の思惑とは裏腹に、それに倍する客が訪れ、バーは満杯状態となったのである。ヨシミツさんが手広く自らの客に呼び掛けてくれた成果である。

9 人の出演者の紹介をしておこう。

魂のギター中村ヨシミツ、

書フォーマンス山後墨仙、

詩即興朗唱佐土原台介、

フルート古川東秀、

唄三原ミユキ、

詩朗読条田瑞穂、

コルネット金子雄生、

台詞桑野幸三郎、

そして店のマスターでありシンガーソングライター深見亮介。

トップバッターは、詩即興朗唱と楽器のコラボ。

私は会場へ赴く電車の中でテーマをしきりに考えていたが、ふと思い付いて「夢」ということに落ち着いた。

テーマを決めると一応筋道を考えるが、筋道を無視する夢の性格にかんがみ、一切段取りを考えないことにした。 なるようになれ、という心境である。

そのためにはアルコールの助けが必要だ。アルコールは思考の壁を取っ払い、感情とイメージの自由な流出を可能にさせる。思考が働き過ぎると、言葉に飛躍と大胆さが失われるのである。

店に入って私が矢継ぎ早にビールを注文するのを見ていてヨシミツさんは

「ほら、アル中のダイちゃんの酒盛りが始まった」

とみんなに吹聴する。

「呑めなくなった人のジェラシーだろう」

と私が水を向けると、彼は

「ジェラシーなんてとんでもない。そんな毒を好んで喉に流し込む人間を俺は気の毒な人だと思うね」

と痛烈に遣り返す。

彼がかつては浴びるように酒を飲み、不摂生が祟ってドクターストップになっていることを知っているので、彼一流の毒舌として聞き流し、ニヤリと口を歪めてわざと美味そうにビールを呑むのである。

7 時半の開演時間を少し過ぎたところで、冒頭に紹介したようなジョークで客を巧みに笑わせながらヨシミツさんのメンバー紹介があり、私は客の真前に立った。夢をテーマとすることをあらかじめ告げ、音の導入の 10 数秒後声を発した。

「私の中には二人の人間が棲んでいる。

一人は日常生活をそつなく生きようとする佐土原台介と夢の中で自由奔放に生きる佐土原台介である。

一方は一方を認めつつも独自に生きている。

夢は時空を自在に超越し、アンドロメダの彼方の宇宙へも冥界へも瞬時に飛翔する。

大宇宙では様々な姿をした宇宙人と言葉を交わし、

冥界ではすでに他界した両親や友人と再会しさして驚くこともなく日常生活を共にする。

日頃は一度も思い浮かべることのなかった子供時代の友達が突然出現して

私を驚かせ懐かしい思いをさせるのだ。

夢の中で偉大な詩を作りその素晴らしさに感歎し、

同時に比類のない権力者となって人を処刑する楽しさを味わう。

それぱかりではない。

私の憧憬であったマリリン・モンローと濃密なセックスをして恍惚感を味わい、

哲学者のマルチン・ハイデガーが往年のイタリアの名女優クラウディア・カルデナーレを伴って私のところに訪れ、　彼女をセックスフレンドとして紹介してくれたりする。

私はそれらの夢がいつまでも醒めないで欲しいと願わざるを得ない。

シュルルレアリスム宣言を書いたアンドレ・ブルトンはその中で、

『夢は全能である』と述べている。

そうだとも。夢は全ての欲望を叶えてくれ、全ての望みを我が手中にさせてくれる。

あるとき寝ている横の窓が少し開いていて、私の魂がスルリとそこから抜け出ていくのを感じた。

私は電線の高さで浮遊し真夜中の街をさ迷い泳いだ。

それ以上高くも低くなく街を見下ろしながら浮遊する。

ふと気が付くと、白い煙のようなものが私の両の踵を支えていることに気付いた。

気付くと同時に煙はスッーと縮まり、私を地上に置いた。

次の瞬間、私の魂は出て行った窓からもとの場所、すなわち私の身体の中に入っていった。

その瞬間私は目覚め、その体験が夢ではなく現実に起こったことを確信したのである。

おお夢よ、私の素晴らしい内宇宙よ！

私は布団に入るとき、今夜も素晴らしい夢を見ることが出来ますように、

と何者かに向かって願い祈る。

大抵は裏切られることはない。

夢は基本的に悪夢であるという人がいる。

殺人犯として刑事に追い詰められたり、大切なものをどこかに置き忘れたり、

糞尿に塗れた悲惨な夢を見ることはある。

だが、そのときに味わう感情の振幅は日常では味わえないものである。

よく夢を余り見ない、見ても直ぐ忘れてしまうという人がいるが、

人間であるということの比類のない素晴らしさを半分以上、

いやもっともっと体験することの出来ない不幸な人だと思ってしまう。

おお、私の生き方としての、創造の原点である夢よ、

私にもっと覆い被さり、私の生を揺さぶり、私に生気を与えてくれ！」

最後のフレーズでは私はほとんど叫んでいた。心から請願していた。音の人たちも精一杯の叫びを発していたように思う。

私の出演の後、新宿でスナックを経営していて、今は亡き詩人の吉原幸子さんと毎日のように飲み明かしていたという詩人の条田瑞穂さんが、吉原さんの長詩『夜間飛行』を朗読した。吉原さんの忘れ形見の純さんがじっと見守っている。

音を付けたのは、トランペットの沖至さんの弟子であるというコルネット奏者金子さんである。二人はぴたりと息が合っていて、条田さんの力強い良く伸びる低音の言葉が吉原さんの詩のエッセンスを伝えて余すところがなかった。

次はいよいよ書フォーマンスの山後墨仙さんの登場である。彼は狭い空間で書を書けるように自ら工夫したイーゼルを用意してきており、そこに和紙を重ね

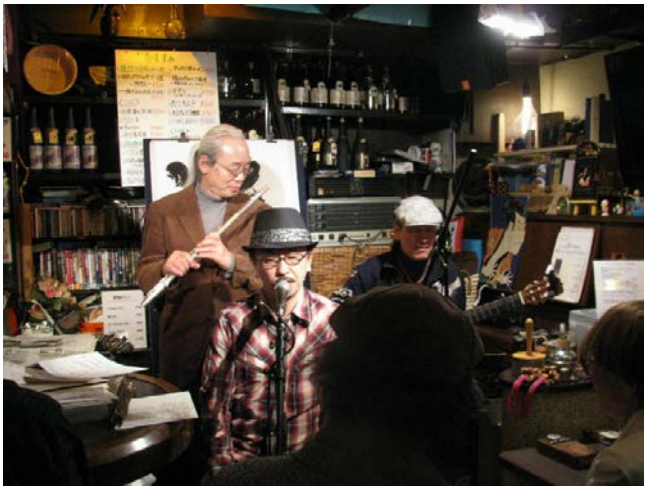
て吊るし、様々な文字を書いてゆく。

　そうした数知れぬ書フォーマンス公演を積み重ねてきているだけに、間の取り方が抜群に上手く、音と文字がよじれるように重なり合ってゆく。

「響」「夢」「寿」『詩」といった独特の書体の漢字が、色彩の異なる顔料で書き落とされてゆくのである。

　それらの書は一枚千円で売られることになり、買い手が殺到するという盛況振りであった。

　次は唄である。ヨシミツさんと組んで公演活動をしている三原ミユキさんが、ヨシミツさん作曲による吉原さんの詩『呪い』、『旅人』、『宴のあと』を余情たっぷりに謳い切った。



その後に、俳優、歌手、プロデゥサーでもある店のマスターが自作の曲を歌った。

味わいの深い曲で、あちこちでライブを行う歌手と呼ばれるにふさわしい歌唱であったというべきである。

そうして、東演の主演俳優であった桑野幸三郎さんが、ゴーリキー作の『どん底』から、主人公が呟く一節を暗誦で語った。

かつて幾度も上演した事のある芝居の雰囲気を滲ませ、「人間とは何か？」と反芻して呟く主人公の名台詞を逡巡することなく 10 分以上に亘って演じ切った。

最後は私の詩即興で〆るということになった。むろん音の人たちとの競演という形においてである。

このときは、客から題を貰うことにした。

「祈り」という言葉が聞こえてきた他は、客からの声がない。

私は「祈り」について何かの言葉が思いつく前に、不意打ちのように、

「ヘルメス・トリスメギストス」

という言葉が思い浮かんだ。

今読んでいる 600 頁を超す大冊の評論（フランシス・イエイツ著）のキーとなる人の名である。

古代エジプトの錬金術師、占星術師、魔術師、プラトンに影響を与えた哲学者にして、またピラミッドの建設者、キリスト教の出現を予言した人とも呼ばれる。

私は若い頃錬金術の本を何冊か読んだことがあり、ヘルメス・トリスメギストスという名が呪文のように記憶の底に残り、甦ったのである！

朗唱の内容をもう記すことはすまい。

ただ、それこそ呪文のようにメギストスの名を唱え続けたことを記しておきたい。

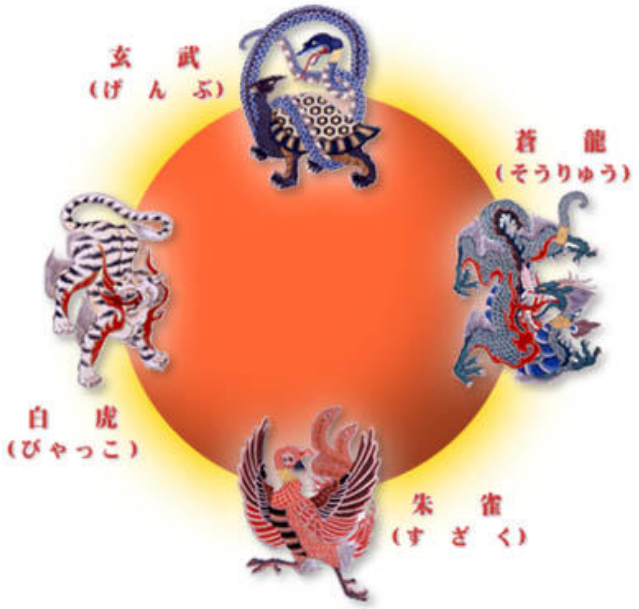
ギター、フルート、コルネットという楽器が絡み合い、あるいは言葉を凌駕し、また大河の流れのように言葉に寄り添い、幸せな時が過ぎていったことを記すのみである。

中村、山後、佐土原が核になってこれからもこの不思議なコラボレーションを続けていこうという約束を交し合って、新宿の街に出た。

# 「みんな TV」四方祓い

<< 作成日時 : 2011/02/13 00:37 >>

2011 年 2 月 12 日




ある小さな TV 局が秋葉原で開局した。「みんな TV]という。

一般の TV を使うと何百万とかかる制作費がその何十分の一の値段で済み、なおかつ全国の TV で視聴できるという新しい形の TV なのである。

ただ、インターネットを通しての配信となるので、パソコンと TV の接続が必要となり多少手間が掛かるが、商品宣伝をはじめ、個人の動向や所属する組織の現状を伝えたりするなど、活用法が無限にある小回りの利く TV なのである。

私が所属する『ジパング文化普及会』の仲間が局の開設者であることから、場所を清める四方祓いの儀式を依頼された次第である。

また『普及会』会長は書フォーマンスの山後墨仙氏であり、なおかつ開設者の H 氏は山後氏の書道の弟子でもあることから、氏の書フォーマンスがメイン

の行事として設定された。

四方祓いは三時から始まるということなので、私は紋付羽織袴を着用し大小の入った刀ケースと白の胴衣の入ったバッグを担いで秋葉原に向かった。

局は駅に近いビルの地下にあった。数十人の男女がアルコールの入った紙コップを手にして談笑している。

スタジオは 30 坪ほどの場所なので四方祓いのための結界は未だ作られておらず、刀を載せる三宝もまだ届いていないということで、隣接する駐車場で予定の型を少し稽古した。

三宝は私のところの塾生がカッパ橋で買って来ることになっていたのである。

時間が迫り結界が張られる。必要な道具はすべて揃っていた。四つの台に立てられたたるきに荒縄が巻き付けられ御幣が吊り下げられる。畳二畳ほどの結界の完成である。

準備は整ったのに三宝がまだ届かない。三宝無しで行うことを考えている内にやっとＴ君が会場に駆け込んできた。その場で急遽彼が私の先導役を務めることになり、私が持参した白の胴衣に着替えることになった。

本当はその時司会をしているＴさんが白衣を着て先導役を務めることになっていたのである。

「ええっ、私がやるんですか！」

と彼は悲鳴に近い声を上げたが、彼はまだ若い役者でもあり、覚悟を決めると動作が速い。

白の胴衣に素早く着替え、大小を載せ三宝を捧げ持って私の前をしずしずと歩む。

結界は、東、西、南、北を青龍、白虎、朱雀、玄武の四神に見立ててある。飛鳥時代のキトラ古墳や飛鳥山古墳の玄室の天井に描かれていたあの四神である。

方角を分かりやすく示すために、あらかじめ四神の名を山後氏に書いてもらっていた紙をたるきに貼り付けてある。

結界の鬼門は艮（うしとら）すなわち北東の方角である。そこから悪鬼、悪霊の侵入がある。従って、鬼門の方角に大小を載せた三宝を置き、その場から両刀を腰に差すのである。

また四神はそれぞれ固有の地形をその方角に有しており、昔の日本人はその方角に沿って都を造営したり築城したりした。東青龍は流水、西白虎は大道、南朱雀は湖沼、北玄武は丘陵といった具合である。

私は結界の中に入り、大小を腰にしたままそうした説明を行う。刀による四方祓いは各古流派に独自に設けられており、ここでは一刀流と我が刀道の四方祓いをミックスしつつ、私独自の方法で行うことを申し述べた。

普通は四隅の方角に向かって刀を振るうだけであるが、私は詩朗唱のプロであるので、刀を振るう前に唱え事をすることにしたのである。

説明を終え、いよいよ開始である。

「青龍　東の方角、流水、流れる水のある地形を指す。

心の中を絶えず湧き出ては流れる清らかな水が、悪感情や邪な気持ちを洗い流してくれることを希いつつ、流れを堰き止め、水を濁らせる悪鬼、悪霊を斬る！」

そう唱え終わり、抜き打ちで下から斬り上げ、左袈裟斬り右水平。直ぐ後ろに

腰溜めに刀を構え、上段となる。

「白虎　西の方角、大道、大きな通りのある地形を指す。

　心の中にドスンと大きな道が一筋通り、道の両脇は人々で賑わい商売が繁盛している。

　その大道の真ん中を堂々として歩み、目的地に向かって邁進出来ることを希い、道を塞ぎ、賑わいを消す悪鬼、悪霊を斬る！」

　右袈裟に斬り上げ、左水平。左に向きを変える。

「朱雀　南の方角、湖沼あるいは海を臨む地形を指す。

　澄みわたった広大無辺な湖や海のように広く伸びやかな心を保って生きることを希い、時化や津波を起こし、湖をけがし、海を汚す悪鬼、悪霊を斬る！」

　八双となり、左右の袈裟斬り上げ。後ろを振り向く。

「玄武　北の方角、丘陵、山や丘の見える地形を指す。

　心の中に聳え立つ峻険な山の頂を目指してその頂点に立つことを希い、登攀を妨害する悪鬼、悪霊を斬る！」

　正眼に構えた刀の刃を上に向け刺突、左袈裟右水平、左抜き胴。白虎のたるきを袈裟に斬って落とす。

　中央に立ち、刃先で光の字を描き、局と参会者の幸運と繁栄を祈る。

　納刀し再び艮の方角に置いてあった三宝に大小を載せ拝礼して捧げ持つＴ君の後に続いて下がる。

儀式の詳細は以上である。その後、山後氏が壁に貼り付けた布に「みんなTV」の文字を描いた。壁の文字の前で撮影会。さらに、この日は奇しくも代表のＨさんの誕生日ということでスタッフからケーキが送られ、やんやの喝采を受けた。若い女性に美人が多く、後で訊くとモデルや女優さんたちであるとのことであった。

散会後、局の代表であるＨさんに連れられて関係者だけで飲み屋へ。帰りは刀ケースがやけに重く感じられた。

# 西洋魔術師の源泉ヘルメス・トリスメギストス

<< 作成日時 : 2011/02/20 19:54 >>

2011 年 2 月 20 日

**種村季弘著『パラケルスス』**

すでに 20 数年前のことになるが、我が尊敬すべき古種村季弘氏が書いた『パラ

ケルスス』という本を読んで感銘した記憶がある。

題名の人物は中世ドイツの医師にして錬金術師、あるいは占星術師という肩書きを持ち、オカルティストとして有名であった。人物及び内容の詳しい記述をここで述べることはしないが、私がこの本から得た唯一至高の言葉は、「マクロコスモス（宇宙）で起っていることはそのすべてがミクロコスモス（人間）の内部でも起っている」というものである。

私はこの言葉に雷に打たれたように感応し、それから私の詩作の原点となった。これ以降オカルティズムに興味を抱き様々な魔術書や神秘主義者の本を読み漁ったという時期を持つ。

**火刑に処せられた魔術師**

ここ 10 年ほどはそうした方面への関心を失っていたのであるが、つい最近、ある本の題名が私の目に止まり、それを高井戸図書館を通して手にすることになった。

題名は『ジョルダーノ・ブルーノとヘルメス教の伝統』（フランセス・イエイツ著　前野佳彦訳　工作舎　2010 年刊）というものである。

A5 版、877 ページに達する本格的研究書であり、ずしりと重い本を手にして中身を少し覗いただけでビビッてしまい脇にどけるということを、数日に亘って繰り返した挙句、一周間前にやっと決心がつき読み始めた。

居眠りと中断との格闘であったが、勢いに乗ると 100 頁ほども進むことがあり、つい先ほどやっと読み終えたばかりである。

題名にあるジョルダーノ・ブルーノというのは、イタリアルネッサンス期(16 世紀）の「魔術師」の名である。

魔術といっても、降霊術を行ったり、人を呪ったりする類の黒魔術ではなく、古代エジプトより伝わったとされるヘルメス教の伝統に則って、天界と地上を結びつけて人間の高次な魂や精神を称揚する宗教色の高い哲学体系とでもいうべきものである。

彼は膨大な著作活動を続けながらヨーロッパ各地を放浪し、各国の王や貴族また著名な学者と会いその名を高めていったが、最後に母国のイタリアに帰ってきたとき、密告を受けて異端審問所に囚われ、生きたまま火刑に処せられるという過酷な運命をたどった。

著者は、このブルーノがイタリアルネッサンス期の芸術、学問に巨大な影響をもたらした「ヘルメス教」の魔術を集大成した思想家として描き、その思想の達成が次代の科学時代の隆盛の橋渡しとなったことを、その前駆者となった魔術師たちの著作を紹介しながら述べている。

**三重に偉大なヘルメス**

ヘルメス教というのは、旧約聖書のモーセ以前の古代エジプトの神官、哲学者、そして王であったヘルメス・トギスネギストス（三重に偉大なヘルメス）という人物が書いたとされる『ヘルメス選集』と呼ばれる一群の作品世界を指している。

ヘルメスは、古代ギリシャの哲学者たちに影響を与え、キリスト教誕生の予言を行ったとされる。冒頭の写真は、シエナ大聖堂の床に描かれたヘルメス・トリスメギストスその人の想像図である。

私はここでこの膨大な書物の内容を逐一なぞる積もりはない。

この書物の感想を書くことになったのは、最初に述べたパラケルススの言葉が、実はヘルメスの『選集』に書かれていたものであったことを、著者の引用文によっ

て知ったことがきっかけなのである。もしかしたら、種村氏の著書では、ヘルメス・トリスメギストスの言葉として紹介されていたのかもしれないが、私はパラケルススの言葉として鮮明に記憶していたわけである。

むろん、パラケルススはイタリアの魔術研究家マルシーリオ・フィチーノがギリシャ語原典からラテン語訳した『選集』を読んでいたはずであり、あるいはギリシャ語原典で読んでいたかもしれない。

**生命の更新**

ヘルメスの思想は、魔術であり占星術であるとされるが、ソクラテス、プラトンをはじめ、古代ギリシャ哲学者に影響を与えているとされるだけに、極めて示唆に富み、奥深い内容を含んでいる。著者によって引用された数多くの文章がそれを証し立てている。

その一部を引用してみよう。ヘルメス・トリスメギストスが息子のタトに語りかける。

「わが子よ、そのようなことを言ってはならない。おまえは現象に囚われて過ちを犯している。命あるものは死ぬわけではない。ただその肉体は合成されたものであるから解体する。これは死ではなく合成物の解体である。分解した後は、破壊されるのではなく更新されるのである。」

更新という言葉に新鮮な響きがある。命の永遠ということを述べたこの考えは、ヒンドゥー教の教えを思わせる。ヒンドゥー教では、ありとあらゆる生命は死ぬのではなく転生するのである。宇宙に解き放たれた魂は別な生命体を得てまた地球へ戻

ってくる。仏陀はこの思想を元にして輪廻転生を説いたのである。

これは現代の科学とも一致している。生き物は死滅すると酸素、窒素、炭素、リンなどの元素の分解し、大気に溶け込む。そうして別の生命体となって地表へ還ってくるのである。

**魂の高貴な輝き**

人類は科学というものを発明し、そのことによって大発展を遂げた。17 世紀に端を発する「この科学による自然支配こそは、近代ヨーロッパ人の驚嘆に値する功績であり、かくまでの功績は人類史の全体を通じてもただ近代ヨーロッパ人だけに帰するものなのである。」(630 頁)とさえ著者は述べている。

ただ、この近代科学による自然支配が人類の幸福に本当に役立っているのか、という反省をいまや持たなければならない時代に差し掛かっている。世界中を何度滅ぼしても余りある核兵器の存在は、近代科学の直接の所産である。

何が幸福なのか？科学がもたらした恩恵に与ることなのか、それとも・・・・。答えは人間の内面の充実にこそある。

すべての存在の父である精神(ヌース)がヘルメス・トリスメギストスに語り伝える。

「おまえが自分自身を〈神〉に等しい者としない限り、おまえは〈神〉を理解することはできない。似たもの同志だけがお互いを理解できるからだ。際限もない偉大さに向けておまえ自身を養い育てなさい。乾坤一擲、肉体の拘束からおまえ自身を解放しなさい。すべての時の流れを越えて伸び上がり、〈永遠〉そのものとなりなさい。そうすればおまえは〈神〉を理解することになる。おまえにとって不可能なことは何一つとしてないことを信じなさい。自分が不死であり、すべてを理解できる、すべ

ての芸術、すべての学問、すべての生き物の本性を、それらすべてを理解できると考えなさい。いと深き処を越え、さらなる深みへと降りてゆきなさい。おまえ自身の裡にすべての被造物の感覚を取り込みなさい。火と、水、乾燥と湿潤のその感覚を。そしておまえはどこにでも存在していると想い描きなさい。地上に、大海に、大空に。まだ生まれていない者として、母なる者の子宮の裡に、青年として、老人として、死者として、死を越えた彼方にある者として、それらすべての者として想い描きなさい。おまえが自らの思惟の裡に、時間、空間、諸々の場所、実体、性質、量、それらすべてを抱き取るなら、おまえは〈神〉を理解できるだろう。」(296～297 頁)

まるで、仏教や武道の悟りの境地を述べた文章のようではないか！『ヘルメス選集』にはこうした含蓄のある言葉が、ふんだんにちりばめられている。

**魔術師と魔術の粉砕**

だが、ブルーノが火刑に処せられた１４年後にとんでもない発見がなされるのである。近代科学の勃興に合わせるように、１７世紀初頭、スイスのジュネーブでプロテスタントの両親の息子として生まれたイーザク・カゾボンという文献学者が、『ヘルメス選集』は、古代エジプトなどではなく、キリスト生誕の後の２～３世紀にでっち上げられた偽書であることを発表したのである。

そのことによって、「〈始源の神学者たち〉の存在に基盤を置くルネッサンス・ネオプラトニズムの経験世界を一撃の下に粉砕した。」(582 頁)のである。

だが、そのことによって慌てふためく魔術師たちではなかった。カゾボンの発表をまったく無視するか、『選集』に後世のキリスト教徒が文章を付け加えあるいは改ざんしたのだ、と称えたのである。彼らは、頑なに『選集』が古代エジプトの神官に

よって書かれたものであると信じようとした。

しかしながら、影響を受けたというプラトンなどの古代ギリシャの哲学者たちの書物に、ヘルメス・トリスメギストスの名が一度も出てこないということ、また「他の遅い時代のギリシアの著作家からの引用が多く見られる」等々の実証は、「ルネッサンス的な魔術師と魔術の根拠のすべてを粉砕した。」

ことによって、ルネッサンス的高揚は急速に萎み、近代科学の夜明けを告げる象徴的な出来事となったというわけである。

とはいえ、すべてが偽作として断じられたわけではないと著者はいう。文体や思想が古代エジプトの雰囲気を伝えその余韻を残していると。

だが、私にとって〈ヘルメス文書〉がキリスト以降に書かれたものであろうとなかろうと、数々の言葉に含まれる真実と感動が消え去るものではない。

後にキリスト教否宗教と名のつくすべてが、宗派同士の争いや殺し合いを続ける歴史を考えると、人間を含めたすべての生き物に同等の輝きを与える(アニミズム的思考を色濃く宿した)ヘルメス・トリスメギストスの言葉は、これからもさらに輝きと真実を顕現するものであることを私は信じて疑わない。

# 京言葉『源氏物語』全五十四帖隔月連続語り第10回

<< 作成日時 : 2011/03/05 23:18 >>

2011年3月5日

第10回目に当たる朗読会が開かれたのは先月の26日(土曜日)。

会を追うごとに観客が増えてきたので、今回から土、日と二日間に分けて行われることになった。

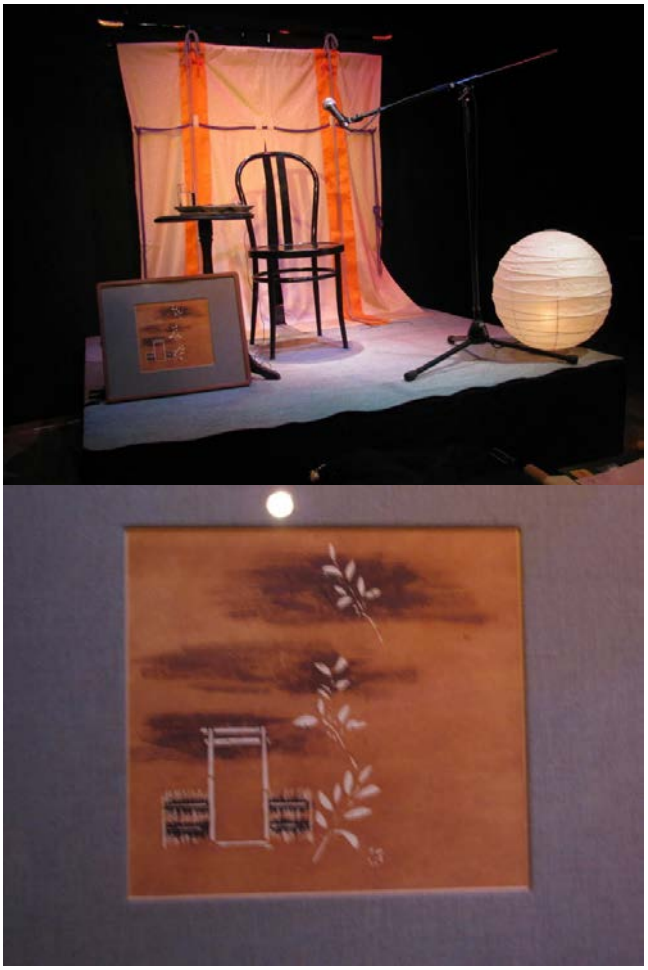
前回は30分遅れて到着したので遅れないように会場に出かけた。

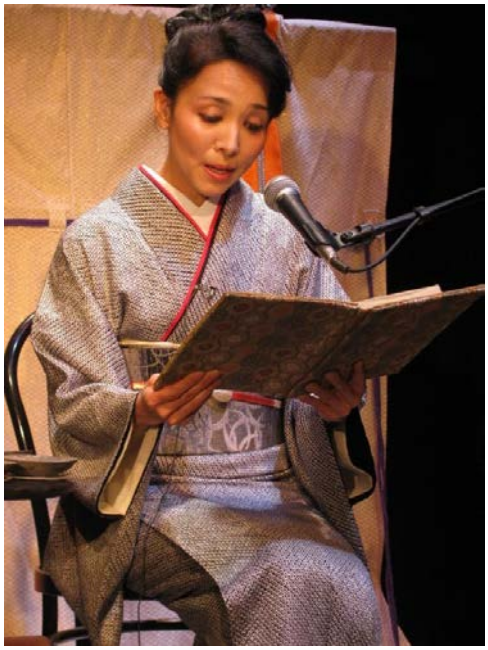
会場を見渡したところ、毎回出くわすメンバーの姿が見られないので、その方々は翌日の日曜日に来られるのだろうと推測された。

二回に分けられたとはいえすでに満員である。今回の帖は「賢木(さかき)」と「花散里(はなちるさと)」。前段の説明ではかなりの長丁場となるという。観客に覚悟の程が言いわたされる。

登壇の前のステージに額縁入りの絵のようなものが展示去れていたので、何だろうと思っていたのだが、御本人が額縁を持ち上げてその説明をされた。

それは『京言葉源氏物語』の作者であられる中井和子先生の型染めであり、「賢木」の中のーシーンを描いたものとのことである。





「賢木」は確かに長い。とはいえしっかりと聴き遂げようとしゃきっと意識を保って聴いている積もりであったが、いつの間にか時空を超越しふっと意識が消えかかる瞬間があり、朗々とて美しい語り手の声に現実に呼び戻される。 この瞬間が何とも言えず甘美なのである。

消えかかる瞬間はほんの数秒なのであるが、夢うつつのそのあわいに至高の時がある。こういう言い方は語り手にとっては不愉快かもしれないが、王朝絵巻の時代への飛翔は、私にとって、意識が消えかかる夢うつつの数秒間があるからこそなのである。トリップはその間になされる。光源氏の常軌を逸して意識と行動が今となって現出する。

「賢木」の物語はおおむね三つの出来事に分かれている。

前段では、自分が生霊となって葵の上を取り殺すその場を実見した源氏が、もはや自分から心が離れてしまったと悲観した六条御安所が、斎宮となって伊勢へ下る自分の娘に付き添いとして同行する場面が語られる。

伊勢へ赴く前に一年間の潔斎を済ませるために人里から離れて暮らす母子

のもとを訪ね、かつての恋人六条御安所と夜を徹して語り明かす哀切な場面は、源氏の未練を示すものであると同時に、もう縁が切れたと思った情人がわざわざ訪ねてきてくれたことに感激する御安所の心情を余すところなく描いている。

普通なら、自分の正妻を生霊となって呪い殺す女など（たとえ過去にどれほど濃密な交情があったにせよ）空恐ろしくて近寄りたくもないと思うはずである。

放っておけば向こうから去っていってくれるはずのものを、のこのこ訪ねてゆく源氏という男の深いものの哀れを解する心情を賛嘆すべきところかもしれない。

しかしながら、彼は御安所の苦悩を紛らせ慰めようとしてようとして赴いたのではなく、あくまでスケベ心で、もしかしたら最後の別れになる前にもう一度抱けるかもしれない、という気持ちで出かけて行ったものであると私はかんぐるわけである。

源氏は情事のためにはどんなことでもしのけてしまう性に貪欲な男なのである。

それは中段で描かれる藤壺の宮に対する手段を選ばない迫り方でも明らかであり、源氏のそうした執拗な肉迫のために藤壺は出家を決意するほどなのである。

後段の朧月夜の君こと尚侍（ないしのかみ）との密通場面でもその厚かましさは際立っている。

いまや自らの天敵とも言うべき弘徽殿の大后（こうきでんおおきさき）の実家に乗り込んでゆき、その娘と密通を重ねるという大胆不敵なことをやってのけているのである。

ついに彼女の父親によってその現場を押さえられるのであるが、その時も寝乱れた姿で女の御帳に横たわり、形ばかりに顔を隠す仕草をするだけである。危険な情事ほど燃える源氏としてはむしろ含み笑いをしたくなるほどの願ってもない状況であったのかもしれない。

一転して「花散里」では、ホトトギスの鳴き声を愛でながら昔懐かしい花散里と安らぎに満ちた一夜を過ごす。

ごく短い帖であるが、前の帖とは違ってのんびりとした時間が流れている。

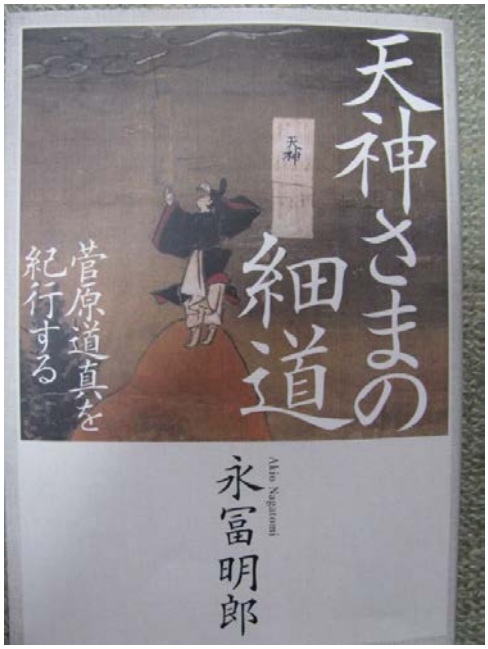
会場は一旦暗くなり、やがて明るくなって語りが終わったことを知らせる。途中の休憩時に客が少し減ったようであるが、数秒間の時空超越の甘美と愉悦を知らない人たちの退出であったのかもしれない。3時間弱の一人語りであり、語り部山下智子さんの疲労は察して余りある。

外へ出るとすでに夜になっていた。

# 天神さまの細道ー菅原道真を紀行する一』を読む

<< 作成日時 : 2011/03/21 12:48 >>

2011年3月20日




**菅原道真とは**

永冨明郎がまた新しい本を出した(東洋図書出版刊　2011年)。

天神さまこと菅原道真の生涯を描いている。

道真は現代では学問の神様として有名であり、受験シーズンともなると、各地の天満宮の立木には必勝祈願を願う受験生たちのおみくじがびっしりと結び付られ、高価な絵馬が奉納される。

だがそれ以上に道真のことについて知って居る人はそう多くは居ないはずだ。中学、高校の日本史で学んだほどのことは、大人になって社会で働くようになればみんな忘れる。受験勉強というのはそういう宿命を持っているのだ。

ただ、道真が九州博多の大宰府に流され、京の屋敷の梅に事寄せて読んだ

とういう歌は、大抵の日本人は知っている。

「東風（こち）吹かば　匂い起こせよ　梅の花　主人（あるじ）なしとて　春を忘るな」

というのがそれである。遠国へ流されたとはいえ、なんとなくのどかで風流な響きを持っているので、道真が置かれた状況の悲惨さにまで想いを及ぼすことがなかなか出来ない。

また、これらのエピソードから、道真という人物を調べてみようという気を起こす人は（居たとしても）ごく稀であろう。 もし私にこの本が送られてこなければ、道真に対する理解は、上記の知識をそれほど出ることはなかったにちがいない。

しかし、送られてきたので読んでしまった。

そうして道真に対する、また当時の政治状況に対する認識を大いに深めることが出来たのである。

まず、認識の段階について、私なりの観点からいくつかに区切って述べてみたい。

その一は、道真の家系が由緒あるものであり、曽祖父の時代から学者の最高位ともいうべき文章博士（もんじょうはかせ）の位を極めているということ。

その二は、藤原氏一族による権力の継承。

その三は天満天神として祭られてゆく過程(顛末）である。

**著者のスタイル**

これらの項目について述べる前に、作者永冨明郎の著作スタイルについて述べておかなければならない。

彼は、対象について語ろうとするとき、対象を徹底して紀行しその現在について述べ、そうして過去に遡行する。　現代と当時を比較することによって、歴史の裂目が顕となり時代の推移が見通せるようになる。

学者ではなくまたプロの著作家でもない彼が開拓した、独特のスタイルと言っていい。

特に、勤め人である彼が常に意識して、現代の会社組織と当時の社会構造ないし権力構造を対比しつつ解説してみる件（随所に出てくる）は冴え渡っており、当時の権力構造を理解するうえで大いに役立っており、また読書の興味を掻き立てている。

**政治家としての道真**

道真の先祖は野見宿祢（のみのすくね）に辿り着くという。

どこかで」聞いた名であると思われるであろう。垂仁天皇（紀元前後）の時代に、力自慢の当麻蹶速（たいまのけはや）と名乗る力持ちと相撲をして相手を蹴殺したというあの伝説上の人物である。

宿祢は埴輪作成のアイデイアを天皇に呈示した人物としても知られ、その功績が認められて土師臣（はじのおみ）という称号を授けられたという。

宿祢の子孫は住んでいる土地の名を姓とすることを願い出、菅原姓となったとのことである。菅原古人（ふるひと）という。道真の曽祖父である。

彼は、大学頭、文章博士を経て、桓武帝（8世紀後半）の侍読となり、学者としての要職を歴任した。つづく祖父の清公（きよきみ）、父親の是善（これよし）、そして道真も全く同じ道を進んだ。まさに筋金入りの学者一族である。

さらに右大臣にまで昇進した道真は時の宇多天皇（887～897）の右腕とな

り、学者としてだけではなく政治家として活躍する。道真が遣唐使の廃止を決めたのもこの時である。

**著者独自の解釈**

　時の権勢を一手に担ってきた藤原一族が黙って見過ごすはずはない。（鎌足を祖とする藤原一族が、時の天皇の下でいかに権謀術数を用いて権力の座を保ってきたかが概観されるが、歴史の勉強にもなり、大変面白い。）

　道真は周到に企まれた包囲網によって右大臣の座を失脚し、遠く九州の太宰帥（だざいのそち　九州地方を統べる長官）という名目で流されることになる。

　道真を政治のパートナーとして親権政治を行おうとした宇多天皇は、強要されたわけでもないのに、道真を放り出すようにしてサッサと出家してしまい、道真の孤立を招く結果となる。

　クーデターとも言うべき道真追放の理由について著者永冨は、歴代の学者が考察する大要を四つに分け論じ、

「私ごときが稚拙な解釈をすべきではないかもしれないが」

　と断わった上で、独自の解釈を施すのである。

　そのくだりは本を読んでもらうしかない。私は冒頭で述べたとおり道真の詳しい伝記については全く無知であるから、定説といったものについては何も分からないが、読み進むうち、官公伝説について永冨は、大学者の向こうを張って処々に独自の解釈を行い、想像力を駆使して菅原道真という一個の謎と歴史に挑戦している。

　一人の人物について一書を成す人間の態度としては当然のことであり、それは評価を恐れず果敢にやって良いことだと思うのである。専門の学者の意見が

聞きたいところである。

**天神となった道真**

さて、九州を統括する長官（太宰帥）という名は名目だけであり、従者は一人しかおらず、食べるものにも事欠く状況の中で、漢詩を創作することを唯一の楽しみとしつつ、栄養失調と心痛が重なり、九州に赴任して二年後にこの世を去る。

死去して間もなく、京で異変が続発する。

天災地異が毎年のように起こり、貴人が相次いで死亡する。道真の祟りであるという風評が宮廷を席巻し、やがて、天神さまとして祭られるようになる。

僧侶を初め様々な人たちが道真の怨霊を語り学者としての功績を述べ、ついに大宰府、京、大阪に官許の天満宮が出現することになるのである。

梅原猛氏が主張するように、不当に処断された貴人たちの霊を鎮めるために時の権力者は祠や神社を建立した。 その最も大規模で有名な例が天満宮なのである。

日本人の原思考というべきものに、人が死ねば神仏になるという考え方がある。生前その人がどんな罪を犯そうと、死ねば浄化されるという思想である。死によってしか魂は浄化されることはないのである。

日本人が切腹を美化し、死刑制度にこだわる理由の一つといっても良いだろう。

天神となった菅原道真は、千年を越える今日に至って、受験生たちに神頼み

される現実に辟易しているのではあるまいか。

# 『磯部廣二を偲ぶ会・三狼展』

<< 作成日時 : 2011/05/02 12:49 >>

2011年5月1日

この会が行われてからゆうに一ヶ月が経ってしまった。

3月11日に大地震が起き、(そのときはすでに案内状が刷り上っていたのだが)、展覧会どころではないという意見もあって関係者が集って議論を重ねた末、こういう時だからこそ元気を鼓舞すべきだという意見が勝り、展覧会の日を迎えたのは4月4日である。

彫刻家・磯部廣二が逝ったのは昨年の10月だが、磯部の40年来の友である石狩在住の版画家・大島龍が、単に磯部の「偲ぶ会」にするのではなく磯部の遺志を受け継いで『三狼展』にすべきであると熱心に主張し、その主張がゆう画廊のオーナーである佐藤由紀恵さんを動かし実現することになった。

また磯部の兄の芳郎さんが「弟は100年後には世界でも有名になる」と信じて疑わず、残された膨大な彫刻作品の一部でも展示できたらという思いか

ら、実現を推進する強力な後押しとなった。

**オリの中の磯部廣二**

会期は土曜日９日までの５日間である。磯部、大島、佐土原による第一回目の『三狼展』が催されたのが昨年の１月であった。

そのときはすでにガンが全身に転移していたのであったが、毎日会場に姿を現していた磯部は、酒の入ったグラスを片手に誰かまわず毒舌を吐き元気な様子で、来年も三人でやろうと述べ、画廊の佐藤さんも了承していた。

それが遺志となったわけである。

前々日に北海道からやってきた大島龍と待ち合わせ、磯部の彫刻作品を保管しているという兄の芳郎さんの病院に案内された。

芳郎さんは保谷で動物病院を経営されている。

病院の診察室の奥は診察や入院のため預かった動物を一時的に入れておくオリが幾つかあったが、今は使用されてはいずすべてのオリに磯部作品がぎっしり詰め込まれていた。

モノが彫刻なだけに、誰も見たことも聞いたこともない珍獣が、診察や手術を待って待機しているごとくであった。　磯部本人の依頼でそれらの作品を郊外の倉庫に保管していたのが画商の谷内大三さんで、彼も出展作品の選別のため病院にすでに来ていた。

運びきれない作品がまだまだたくさんあるという。しかし、大会場ではないので展示する作品は限られる。三人で出展すべき作品をテキパキと決めてゆく。選び出された作品は翌日赤帽の手で銀座の会場へ運ばれる手筈に

なっている。

**出現した二点のブロンズ像**

さらに、まだ誰の眼にも触れていないブロンズ胸像が二点、当日会場に運びこまれることになっている。

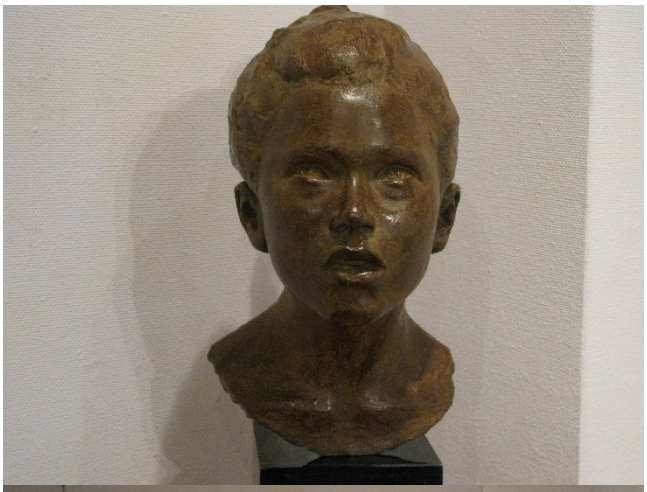
石膏のまま残されていたもので、兄の芳郎さんが弟がそうしたかったであろうブロンズ像に成型したのである！

磯部は武蔵野美大を卒業して間もない頃パリに渡り、かつて面識のあった彫刻家のジャン＝ピエール・ダルナ氏（ロダンの孫弟子）の助手を一年半ほど務めたことがあり、そのとき知り合った少女がモデルとされている。

写真で見てもらっても分かるように、見事な具象作品である。後年の抽象彫刻の基礎になるもので、彫刻家としての彼の確かな腕が伺われるのである。

その二点は会場に異彩を放っていて、巨大な抽象木彫に圧倒されてきた我々の気持ちを引き締めるのに十分であった。

さて会場構成はこうだ。



**遠くバルセロナから出展**

ゆう画廊は狭いが、五階六階と二部屋使える。空間が有る方の六階が磯部作品で占められ、五階は彼の友人たち展ということになっている。

磯部は名簿を始末していたようで、彼がどんな作家と交流していたのかは知る由もない。私たちにとっては頼りになるのは、第一回『三狼展』のときの芳名録と磯部の死を見取ったＳさんの交友の範囲でしかない。しかも、芳名録は半数が住所を書かれておらず連絡のしようがないのである。

私は詩の方で絵描きではないので、彼がどのような人たちと付き合っていたのか皆目分からないのである。無論、長年のつきあいのある大島も北海道在住であるから、磯部の親しい人たちの氏名住所を知る由もない。

従ってかなり偏った人選になったはずであるが、20数名の磯部ゆかりの人たちが作品を寄せてくれ、所狭しと作品を展示することが出来た。

沖縄から詩人で画家の高橋渉二、北海道から彫刻家のカビラヤスオ、スペイン・バルセロナから北村ヒロシが作品を送ってくれた

**ほくそ笑む磯部**

４日の初日は夕方から磯部追悼のイベントを行うことになっている。フラメンコ舞踏家の手下倭里亜さん、三味線の早乙女和完さん、ギターを手にしたシンガーソングライターの小藤博之さんが、素晴らしいアンサンブルを披露してくれた。

私も大島龍の手によって北海道石狩に運ばれた磯部の遺骨が、石狩川河口突端の灯台の下に埋葬された話しを基調に、大震災と重ね合わせて彼の霊に語りかける即興朗唱を行った。

その日の飲食の費用のすべては兄の芳郎さんが賄って下さった。イベントに先立つ挨拶でお兄さんは、

「弟は人付き合いの難しい孤独な男と思っていたが、こうしてたくさんのお知り合いの方々が来て下さり、正直なところおどろいています」

と述べられたのであった。

次いでこの会の提唱者であった大島が磯部との長い付き合いについて語り、作品を寄せこの日のために集ってくれた人たちに感謝の気持ちを伝えた。

そうしている間にも次々に訪れてくる人たちで画廊に人が入り切れなくなり、料理にありつけず、回廊で酒だけ飲んで帰ってゆく人たちも多かったのである。

磯部追悼は震災で亡くなった人たちへの追悼でもある。私は出演者たちの許しを得てイベントに集って下さった人たちから義援金を集め、そのお金をすべて東日本大震災の被害者に送ることにしたのである。客は20名ほどであったが、2万円に近いお金が箱に入れられた。

磯部は阪神大震災の後、ボランティアとして神戸に向かったという。私たちの行為を彼は彼岸からニタリとほくそ笑んで見守ってくれたはずだ。

**歴史に残るイベント**

友人たちの作品が多かったせいもあって、会期中たくさんの人たちが会場を訪れてくれた。

最終日にも追悼のイベントが行われた。出演したのは、ジャズドラマーの中村達也さん、チェロと横笛の星衛さん、南米音楽の標（しめぎ）忠浩さんである。

それぞれのソロの後三人で行ったセッションは、初日と同様語り継がれるほどのものであったように思う。

彼らもまたボランチア出演であり、客から集めたお金はすべて義援金として寄付をした。磯部の彫刻郡は六階で清楚な雰囲気を漂わせて会期中屹立していた。

関係者である私たちは、姿のない磯部がアルコールの入ったグラスを持ち上げて、終日私たちの横に居て飲み続けていたと感じていた。

彼は確かに私たちと共に居たのである。

三回目の三狼展はもうないであろう。磯部のイメージは我々の心の中に住まわせ、霊界からその都度呼び戻す彼の疲労を避けさせるべきだと思う。

最後に、言い訳と受け止められても仕方がないが、「偲ぶ会」から一ヶ月も経って記事を書くことになってしまった怠慢を関係者の方々にお許しいただきたいと思うと共に、日々テレビを見ていて気持ちが萎え文章を書く気力を持てなくなったことを告白しておきます。

**{出展作家}(アイウエオ順)**

阿部浩　安藤哲夫　磯部廣二　大島龍　鷹啄栄蜂　辻野栄一　角田たけ子　犬養三千子　イマイ恵子　大谷早苗　カビラヤスオ　北村ヒロシ　佐藤ゆう子　佐藤由紀江　佐土原台介　志田智子　末木芳　春原武彦　醍醐イサム　高橋渉二　知多秀夫　TOSI　秦栄　湯沢悦木　米原剛　ホルモン関根みゆう　毛海卓爾

# 初夏の野外稽古

作成日時 ： 2011/05/02 18:35

２０１１年５月２日

初夏の陽気に誘われて稽古用の作務衣に着替え、鞘突き木刀を入れた刀ケースを肩に塚山公園に出かけた。

一週間振りである。

公園の端っこにあるその場所は、鮮やかな緑の葉をマントのようにまっとった立木に覆われており、６畳ほどの広さがある。

「道場」の直ぐ後ろに通り道があるが、木刀を振る姿が木立の間には見えても数メートル以上離れているので、通行人に対する恐怖感や威圧感はあるはずもない。

不遜な言い方になるが、まさに私のために設けられた空間に思え、近くに越してきて５年になるが、季節を問わず稽古場として遣わさせていただいている。

季節によって木立や周囲の風景に変化があり、野外でしか味わえない楽しさがある。

一週間前にはまだそれほど成長していなかった潅木の若芽がツンツンと長い茎をランダムに伸ばし、艶やかな輝きを放っている。

今日は連休真っ只中の普通の日であり、学校もあるので野球少年たちの姿も見えない。たまに犬を連れて散歩をする人影を遠くに見るが、話し声一つ聞こえるでもなく静かなものである。

私が遣う流派は「刀道」というが、平成に入って新しく創られた新流派で、おそ

らく古武道としての剣術流派としては最新のものであろう。

最近になって新しく考案された型が幾つか加わった。座り居合９本、立ち居合９本、新しい組太刀（中伝）８本の計２６本である。

考案したのは殺陣師にして刀道の主席師範である林邦史朗先生。

居合の部はともかく新組太刀は派手な殺陣の要素が色濃く出ていて、正直なところ私には馴染まないところがあるが、考案されたばかりのこれらの業は、すぐさま３月の春季昇段審査にも取り入れられ、遣えないと段位が頂けない仕組みになっているので、小生の文武両道塾の弟子たちに覚えさせるために、まず私自身が修熟しておかなければならない。

すでにほぼ身に付けはしたが、一つ一つの動作を正確に、また揺るぎのないものとするために、木洩れ日を受けながら一刻あまり汗を流した。

木刀を振っていると何もかも忘れて無心になる。至福のときと言ってよい。身体から余計な力がいっさい抜け、その代わりに自然そのものともいうべき不思議な気力が全身に満ちてくるのが感じられる。

際限なく木刀を振っていたい誘惑に駆られながらも、明日のことを考えて型を遣うのを止め、抜き打ちの稽古に移った。

周囲に茂る潅木の芽を枝ごと斬るのである。木刀を遣うのであるから吹き飛ばすと思われがちであるが、狙った場所へ正確に刃の部分（木刀に刃はない）を当てると、枝は刀で斬ったようにすぱりと斬れる。

実は最近まで「吹っ飛ばす」状態であったが、最近になって「斬れる」ようになった。少しは進歩したといったところか・・・。

斬り飛ばされる芽には気の毒であるが、剪定していると自分には言い聞かせている。

ひとしきり稽古を続け、汗を掻いた身体のまま持参してきた手製のドクダミ茶を飲んで喉を潤し、「道場」の外に出て一礼し自転車で自宅に向かった。自宅までほぼ三分。

# 京ことば『源氏物語』全五十四帖隔月連続語り第11回

<< 作成日時 : 2011/05/14 18:59 >>

2011年5月14日

**これまでにない気持ちの高揚**

連続語りも今回で11回目。隔月であるから丸二年の歳月が経とうとしている。

入場者も次第に増えていき、前回から二日間の公演となった。

今回から舞台背景が変わった。衣紋掛に打ち掛け衣装を広げた格好から、金糸銀糸で光り輝く長い反物が天井から吊り下げられる様式となり、今までとはまた異なった雰囲気を醸し出している。

北関東大震災の直後だけに、どのような語りとなるのか幾分緊張気味に本人

の出番を待った。

　時間を少し押して現われたご本人もまた少しく緊張気味に話を進め、物語を最後まで語り通すことの決意を述べ、（言外に）震災で亡くなられた人たちへの供養の語りでもある旨を滲ませた。

　彼女の決意と緊張感は感情の高揚ともなってゆき、語りにこれまでにない気持ちの高ぶりがひしと伝わってきたのである。

**放縦な性の道徳観念**

さて、回が進むにつれ、光源氏という主人公の性の遍歴はますます磨きがかかり、傍若無人の行動が際立ってくる。

前回の第10回「花散里」では、帝の后候補として予定されていた朧月夜の君との密通が顕わとなり、源氏は窮地に立たされる。源氏はこの君の奔放な性格（おそらく性行動でも）がよほど気に入っていたらしく、政敵ともいえる先帝の后弘徽殿大后の実家に引き篭もっている朧月夜の君のところに、毎夜のように忍んでゆくのである。

朝もまだ暗い内に引き上げなければならないところなのだが、機を逸して朝遅くまで几帳台に二人して臥しているところを、こともあろうに相手の父親の右大臣に見つけられてしまうのである。

言ってみれば現天皇の后候補を盗み取ってしまったのであるから、これは大罪といわざるをえない。

中国などであれば、たとえ身分がどんなに高貴な人物であっても死罪は免れないところである。

ところが本朝の光源氏の場合は（現帝の腹違いの弟という立場ゆえか）、官位の剥奪程度で済まされている。しかも源氏にはそうした処罰さえ不満なのである。なぜあの程度のことで自分が窮地に立たされなければならないのか、不満たらたらなのである。驚くべき放縦な性道徳観念といわざるをえない。

**明石の入道登場**

むろん、現代から見ればの話であって、当時の道徳観念からすれば「またやらかしたか」といった程度に見られていたのかもしれない。相手が天皇であることで、形だけ処罰を受けたというところであろう。

しかし、さすがの源氏も自分の官位剥奪が周囲に係累を及ぼす懸念を抱く。

まかり間違えば天皇への謀反と受け止められる恐れがあったからである。なにせ懲罰断行の張本人は源氏を敵視する弘徽殿大后なのである。

源氏は自ら謹慎する決意を固め、紫の上、藤壷入道を始め、周りの愛妾たちと入念な別れの挨拶を交わし、数人の連れと共に須磨（現神戸市近郊）に落ちてのびてゆく。

うらぶれた漁村である須磨の屋敷をいくら京風に造り変えても、都での華やかな宮廷生活への郷愁が癒されるべくもない。

悶々鬱々と暮らしているところに、近隣の明石の浦に屋敷を構える播磨国守護の明石の入道という人物が登場する。入道は、京からすこぶる高貴な人物が須磨に落ちのびてきて住み付いているという話を聞きつけ、自分の娘をめあわせたいと考えるようになる。

**大時化に恐れおののく**

だが源氏はそんなことはつゆ知らず京へ思いを馳せながら鬱々としているところへ、親友とも言うべきかつての頭の中将、今は参議となった三位の宰相が訪ねてくる。喜び勇んだ源氏は宰相をもてなし一晩飲み語り明かす。

その宰相も明け方には帰って行く。

またもとのうら寂しい生活に戻った源氏は、ある日浜へ出て幔幕を張り巡らし陰陽師にお祓いをさせて物思いに耽っているところに、にわかに風が吹き始め、やがて横殴りの雨になり、雷鳴が鳴り響き、浜は大時化（おおしけ）となる。

前代未聞の大荒れの天候にそれぞれ肝を縮め寝屋に潜り込んで、やっと払暁の静かな眠りに就く。うとうとと寝入った源氏の夢枕に何者とも知れぬ人物が立ち、「帝がお勧めしているのにどうして参内されぬのか」という。源氏ははっと目覚めるが、気味の悪い夢を見たと恐れおののくのである。それがこの帳の結

語である。

**大和魂は紫式部の言葉**

私は、いつものように、ときにうつらうつらと夢見心地で山下語り部の美しい声を頭の裏側辺りで聞き、はっと目覚めて今度は幕のかかっていない真正の声を頭の芯で捕らえようとする。

交互に訪れるうつらうつらと覚醒の時間の積み重ねが、私の京ことば源氏物語の世界なのである。じつに幽玄にして夢幻の古典世界というべきであろう。そのまま放っておけば法悦至極なのであるが、ブログを書くという作業を自らに課している。したがって、「書く」という行為においてどうしても原文の参照が必要であり、瀬戸内寂聴さんなどの現代語訳を手元に広げることになる。

あのキッド・アイラック・アート・ホールでの夢幻の時空に比べれば、訳文参照は次元の低い世界といわざるをえない。

長丁場を語り終えた山下語り部は、「大和魂という言葉が不幸な使われ方をした一時期がありましたけれど、大和魂ということを最初に言ったのは源氏物語の紫式部なのです」ということをおっしゃった。

たしか江戸期の学者本居宣長が、源氏講釈でそういうことを強調していた記憶があるが、日本人独自の気持ちの持ち方、考え方、感情の方向性といったものは、全体の気分を引き締め、大きな力となって結実する何かなのである。

彼女は、その力が一日も早い日本の復興に良い作用として働くに違いない、ということを言おうとしたように私には思われる。

# 宮本武蔵の謎

<< 作成日時 : 2011/06/25 22:59 >>

2011年6月25日

**稀代の剣客の凡庸化**

昨年の6月11日のブログで好村兼一氏の著書『伊藤一刀斎　上下』を取り上げ、「伊藤一刀斎とは何か」というタイトルで論評を加えた。

一刀流の流祖である一刀斎については、有名な割には生涯についての資料は無いに等しく、それゆえに以後の剣術関係者や作家の想像力を掻き立て、たくさんの小説や論評が書き継がれてきた。そうして微妙な相違こそあっても、一刀斎についてはほぼ共通した人物像が出来上がっていたわけである。

しかしながら、好村氏は、そうした人物像をひっくり返すほどの大胆な発想で、新しい一刀斎像を創造した（でっちあげた？）のである。

新しい資料が発見されたといったことではないのであるから、大胆に想像力を駆使して、これまでの人物像をひっくり返そうとしたただである。一刀斎について新しく小説を書こうと思えば、でっち上げといわれようと何と酷評されようと、とにかく新説を出すしかないと思われたのであろう。破れかぶれの発想と言わざるをえない。

当然の結果として、稀代の剣客の剛絶な内面性に肉迫することに失敗しており、奇想倒れに終わってしまっている(詳しくは2010年6月11日のブログ「伊藤一刀斎とは何か」を参照)。

**武蔵は養子であった！**

その著者が一年ぶりに新しい本『行くのか武蔵』を出版した(角川学芸出版　平成22年)。

図書館で見つけたのであるが、「また一刀斎と同じ手法でやるってか？」と眉唾ながら借りて帰った。

読んでみると案の定、これまでの武蔵像をいかにひっくり返すかという野望と想念でこの本は満ち溢れている。

この本は武蔵というより父親とされる無二斎(本文では無二)により多くの頁が割かれている。

冒頭から子宝を得ないまま妻に去られた無二の少なからず軽薄で多情な行状が描かれる。その時点で無二には実子が居ないということが明らかにされる。

武蔵は播州印南郡米堕(米田)村の田原甚右衛門家貞の次男として生を受け(田原家系図)、無二の養子となったとされている。

実はこの説は古くから知られており、著名な武道研究家綿谷雪(きよし)氏がか

ねてよりこの説を主張されている。なおかつ武蔵は秋月城に没した新免無二斎の死後の養子だというのである！

通説では武蔵は作州宮本村の平田武仁の実子で、その父親から剣を学んだとされている。平田家系図にそう記載されているからことはややこしくなる（武蔵の家系図は平田家と田原家の二つあるのだ！）。

ところがこの小説では、平田武仁は武蔵の養父宮本無二（新免無二斎）の近所に住む土豪にすぎない。つまり、平田無仁と宮本無二は全くの別人として描かれているのである。

武蔵養子説はある確かな根拠に基づいている。その根拠というのは、武蔵の養子伊織の故郷とされる現加古川市木村に鎮座する泊神社の棟札がそれである。

棟札は武蔵が没してわずか八年後に、他ならぬ伊織が建てたものであり、そこには無二が没したあと（未亡人の）養子となったと書かれている。『宮本武蔵のすべて』の著者の一人である武蔵研究家岡田一男氏もその説に従っておられ、「いやしくも氏神に奉納する棟札に偽りがあろうとは思えない。」と述べている（１４２頁）。

**通説とかけ離れた武蔵像**

また通説によると、武蔵は地元の讃甘(さのも)神社の神主が両手で太鼓を叩いているのを見て二刀流の発想をえたとか、後年武者修行中にある村で反乱を起こした百姓たちと戦ったとき、木刀を持って戦っていたが、偶然道端に落ちていた木切れを左手に木刀を右手に持って縦横に両刀を振るい、二刀流開眼の端緒となった、などとされている。

ところがこの本では、養父の無二が元々二刀遣いとされ、それを当理流とまで名付け、養子の武蔵に伝授したことになっている。

さらに驚くべきことに、武蔵は元は由緒ある武家である田原氏の次男として（武者修行に出た後々までも）育ちと躾の良い模範的な侍として最後まで描き抜かれるのである！これには心底驚いた。

いくら通説に異を唱えようとする意図があっても、終世蓬髪と衣服に拘らない生涯を貫き、武者修行時代から続いている決して入浴しない生活風習を改めようとしなかったといわれる武蔵像(両刀を下段に構えて睨み据える武蔵画像を見よ）と余りにもかけ離れすぎている。

**四つの問題点**

また、関ヶ原の戦いで西軍に組し父無二と共に奮戦した様子が事細かに述べられているが、実際には、武蔵が関ヶ原の合戦に加わったどうかについては、確たる資料は見つかっていない。親子でともに奮戦し、西軍が戦いに負れて、二人で命からがら落ち延びるくだりは間延びした創作に過ぎない。

以後武蔵は武者修行の旅に出、無二は旧知のつてを頼って九州福岡藩の黒田家に仕え、互いに行き来を繰り返しつつ、ついに巌流小次郎との決闘シーンを迎える。

この場面でも作者は結構サプライズの場面を設定している。

その一、小次郎が30数歳の無頼漢武芸者として描かれているということ。

その二、武蔵が決戦場で使用した櫂の木刀は、船島に向かう船の中で削ったものではなく、あらかじめ削って木刀の形にしてそれを持参したということ。

その三、武蔵は刻限に遅れて到着したのではなく、小次郎と同時に船島へ到着したとされたこと。

その四、これが最もサプライズを誘うことでもあるのだが、小次郎は武蔵の一撃で絶命せず倒れたまま息をしていたのであるが、船島へ弟子を伴って密かに渡っていた養父無二が倒れている小次郎の下に来て、弟子に撲殺させたと述べられていることである。

**小次郎は一体何歳であったのか**

この四つの事柄については、根拠の無いものもありまた色々な資料で出ている説に基づいて述べられている個所もある。

この四つの記述についてまず見解を披瀝してみよう。

その一、小次郎は、吉川英治の本では20前の紅顔の美少年ということになっているが、その後の研究で巌流小次郎とは一体どのような人物なのか、ということが取り沙汰されるようになった。

巌流は元々細川家の家士であったという説があり（ここでも年齢は不詳）、戦国時代の富田流小太刀の名手富田勢源の弟子、いや、勢源の弟子鐘巻自斎の弟子であったという諸説がある。

すでに以前のブログで述べたところであるが、もし勢源の弟子であったら、小次郎は武蔵との決闘時60歳をゆうに越えていなければならず、すでにその強さを全国に知られた30前の武蔵と戦うことは無いはずであり、勢源の弟子説はほぼ否定されている。

勢源の弟子である鐘巻自斎のその弟子ということになれば、武蔵との決闘時には壮年で通用するわけであり、いまやこちらの説が有力となっている。ただし、こちらも有力な資料があるわけではない。

## 櫂の木刀説の真偽

武蔵以上に小次郎は謎の人物なのである。

その二、吉川英治初め武蔵本はほぼすべて、決闘に使った木刀は船島に向かう船中で櫂を削って作ったとされている。実は、私はこの説に以前から疑問を抱いていた。

何故なら、武蔵の生誕地とされる美作宮本村（すでに述べたごとく養子としてこの村に貰われてきた）に建てられた武蔵記念館に展示されている「巌流島で武蔵が用いた木刀」の模型は、櫂を荒削りしたものではなく、優に三尺を超える完全な木剣の形をしていたからである。たかが二時間に満たない船中で櫂を削ってあのような完璧な形の木剣を作れるはずはないのである。

資料館でその木刀を見たとき感じた疑問を小説の作者は解決してくれている。

## 武芸者の誇りを損なう作者の説

その三、武蔵と小次郎が船島に同時に到着したことは、古い資料で触れられているとのことである。

その四、養父無二が息のある小次郎を撲殺したという記述は出鱈目な創作とは言い切れない。

というのも、『沼田家記』という古い資料に、武蔵の弟子たちがあらかじめ船島に渡り、決闘後倒れてなおまだ息のある小次郎を寄ってたかって撲殺したという記述があるらしく、おそらくその説に従って好村氏は、殺したのは武蔵の弟子ではなく養父無二とその弟子にしているわけである。

小説であるからどのような記述も許される、と考えることは自由であるが、余りに突飛過ぎまた理に反していると読者の共感を得ることが出来ない。

養父無二は、この小説によると二刀流の創始者であり、戦で武功を挙げ主君の新免則種から、新免の姓を賜り家老職にまで取り立てられた武辺者である。その誇りある武人が息子の決闘の場まで乗り込んで行って、倒れている息子の決闘の相手を撲殺する行為に出るなんてことはありえないことである。

というより、一芸に達した武人を侮辱する記述であると断じることができる。

作者は、フランスで剣道を指導する範士八段の武道家とのことである。武道の真髄に達している人間が、いくら小説上の設定とはいえ、この小説における無二のような卑しい行動を取るはずはないと思わなければならない。

**作者は極意とは無縁の人である**

前作『伊藤一刀斎』における一刀斎の処理に私が大いに不満を抱いたのは、まさにどこにでも居る凡人の次元で稀代の剣客を描いたことである。死ぬほどの厳しい修練を自らに課し、幾多の生死に関わる闘争を経てその生を全うできた人物が、俗世に生きる凡人と同列であるはずがない。

雲の上の人を引き摺り下ろそうとする作家魂が分からないわけでもないが、以上のような記述に接すると、剣道八段でありながら武道の極意の次元を理解できない人というしかあるまい。

こうした作家に遡上に載せられる古の名人達人が気の毒ですらある。

あまた語られてきた剣の達人を改めて語ろうとすれば、奇想か常識の転覆しかないと思い切ってしまうのであろうが、強引ともいえるでっち上げは歴史と人物への冒涜ということになりかねない。

作者に対しては、新しい犠牲者を造り出すことのないよう一読者として願うばかり

である。

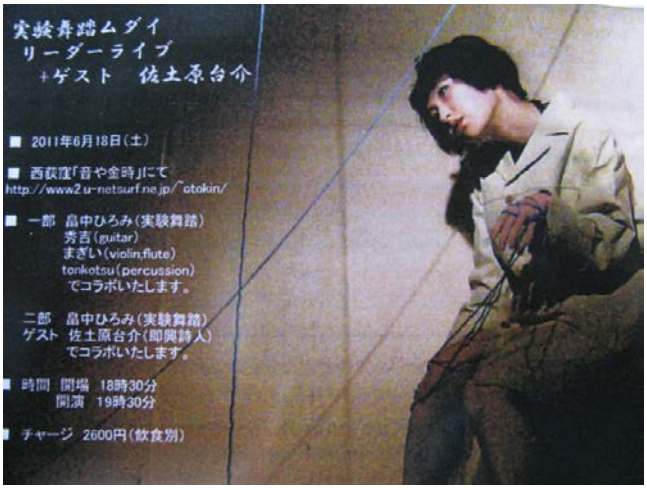
（注記＊宮本武蔵という歴史的人物像は未だに謎だらけである。二人武蔵説、二人の父、二人の母、二つの家系、出生地は播州か美作か、養子か実子か、吉岡一門との決闘は本当にあったのか、何故武蔵は『五輪書』に巌流小次郎との決闘を記していないのか、武蔵の足跡に関してすべてが謎と言っても良いほどである。

ただ、彼が実在して『五輪書』を著述したということ、唯一の真実と思われるのはそのことだけである。）

# 舞踏と詩即興朗唱

<< 作成日時 : 2011/07/02 17:03 >>

2011年7月2日




**畠中裕美との出会い**

舞踏家そして女優である畠中裕美(ひろみ)さんから、自分の舞踏公演でゲストとして出演して欲しいと声がかかったのはもう何か月も前のことである。

彼女とは下北沢の書店でひょんなことから知り合った。

私が店員に「トリウッド」という小さな映画館の場所を訊ねたとき、首を傾げる店員の様子を見かねてか、「そこなら知っていますので案内しましょうか？」と背後から声を掛けてくれたのが彼女だったのである。

自分の父親の年代をもはるかに超えるような年配の私に気安く声を掛けてくれ、そこから5分ほどのところにある映画館へ弾む足取りで案内してくれた。

この映画館は、若い映画青年たちの実験作品を上演してくれる稀有なコヤとのことで、私はある飲み屋で知り合った映画青年の作品を観ようとやってきたのであったが、場所の心当たりはトンと無かったのである。

迷わず案内してくれたところからすると、彼女は何度かその場所に足を運んだことがあるのだろう。ちなみに、今上映している映画は観ていないというので一緒に観ることにした。何か他に予定があって本屋に来ていた訳ではないらしい。

映画は若者特有の独りよがりの貧しい作品であったが、窓にゆれるカーテンや川の辺に立つ樹木を映したシーンに瑞々しい感性を感じた。

終了後二人で飲みに行くことになった。年甲斐も無く、

「おっ、これは脈があるぞ！」

と一瞬思ったことは否定しえない。

飲み屋で向かい合って席に座り、表現のこと、生きるということ、彼女がこれから何をやりたいかといったことなどについて、二時間ほど喋り合った。小柄ではあるが生き生きと輝く目をした中々チャーミングな女性であり、私もまた水を得た魚のように勢い込んで喋ったに違いない。

何杯も焼酎をお替りして(彼女はカクテル)腰を上げたときには、さもしい下心は完全に消え果ていた。

また会うことを約束して手を振って別れたのであるが、私は何時にもなく機嫌よく帰路につくことが出来た。

いってみれば、私がナンパされた形であったわけであり、そういうへんてこりんな娘がいることにある種の驚きを感じていたわけである。

それから二度ほど会って酒を酌み交わし、また私の詩朗唱公演に招いて舞踏を披露してもらったりしたのであるが、忙しさにかまけて連絡を怠っていた矢先、ゲスト出演の申し出rが為されたという次第である。

何とも長い前置きになったしまったが、彼女との出会いについてはぜひ書いて

おかなければと思い、ついこのような長文になってしまったのである。

**心の余裕が決め手**

公演日は6月18日の土曜日。

何とこの日は、午後から店で西部劇の上映会を主催する予定が入っており、その会を終えてから慌しく西荻の会場に繰り出すという何とも慌しいスケジュールを組んでいたのである。

しかし、上映会に参加してくれた客が4人ばかり公演会場に流れてくれることになり、ゲストという立場ではあるとしても、何とか面目を施すことができた。

会場は西荻のライブハウス「音や金時」。この場所では、半年ほど前フラメンコギターの日野道生さんに招かれて共演したことがある。ここも詩即興ライブであったが、十分な時間的余裕を持って会場に臨むことが出来たので、即興も比較的上手くいったように感じられた。

この日は、ほとんど何も考えることが出来ず会場入りしたことで、精神の余裕を失っていた、という言い方ができると思う。

外側から考えれば、即興であるからその場で考えればよく、時間に間に合えばよいわけである。

しかしながら、テーマや言葉を十分に考える時間ということではなく、誰にも拘束されないフリーな状態で出演前の数時間を過ごすことができるかどうかということが、即興という心の状態にとって何よりも大切でおることを改めて実感した次第である。

**死は生の瞬間の光芒**

公演全体を通して、出演料をいただくプロとしての役割を一応果たすことはで

きたはずであるが、自分にとって満足のいく即興朗唱ではなかった。何時にもまして繰り返しのフレーズが多く、テーマそのものが陳腐に堕す寸前のきわどいものであった。

東北での大震災という思いテーマがのしかかってきたことは疑いなく、「死」をテーマとせざるをえないその必然的な道行きは、どのような切り口をもってしても語り尽くされた常識を超え出ることは至難なことであった。

しかし私は死ということを前面に押し出し、同じ言葉を繰り返しつつも結論に導いていった。

つまり、忌まわしい死は忌まわしい生の在り方からもたらされるのであり、「最良の死は最高の生を生きることによってもたらされる」というのがそれである。

地震による家屋の倒壊や津波で生を失う人にとって、最良の死は程遠いことに違いないが、運命としか言いようのない災害による突然死は、それまで生きた生の一瞬の光芒なのであり、それ以後どのようにしても輝くことの出来ない至高の輝きの瞬間なのである。

生き残った人々の記憶と感情の中に永遠に刻み付けられる生の頂点というべきであろう。

私は会場を埋めた客に向かって生の至高の瞬間とまで言い切ることは出来なかった。そのことが言えず言葉は逡巡し繰り返すしかなかったのであろう。ソクラテスが言ったように
「人間は必ず死ぬ、生きていることは死を修練することである」と。

第一部で、裕美さんが凄いとしか言いようのない男女の情念の絡みを男優とともに踊っていたが、私はひたすら言葉について至高を巡らせ続けていた。

「死とは何か？」「文明とは何か？」

　言葉を深く考えようとすればするほど、喉を突いて出る言葉は浅い次元で空回りしてしまうものである。

　酔いに身をあずけきって心を空っぽにしておくこと、これが極意というものである。

　また一つ心が極まった、意識の水平を突き破る真ん丸の魂・・・・・

# 京ことば『源氏物語』全五十四帖隔月連続語り第12回

<< 作成日時 : 2011/07/03 23:36 >>

2011年7月3日

**美女の怪我**

「音や金時」ライブの翌日6月19日の日曜日、山下智子さんの『京ことば　源氏物語』を聴きに出掛けた。いつもの通り、作務衣雪駄履きの出で立ちである。

第10回から土日二日続けての公演なので、二日目の日曜日は満員ではあるがスペースに若干の余裕がある。 この日山下さんは、ステージに上がる時に係りの女性に手を引かれていたので、「おや」と思ったのであるが、席についてからのお話しでは左足首を骨折されたとのことで、手を引かれていた事情が判明した。

絶世の美人もそういう怪我をされることもあるのかと、妙に感心しまた痛ましい思いに駆られた。

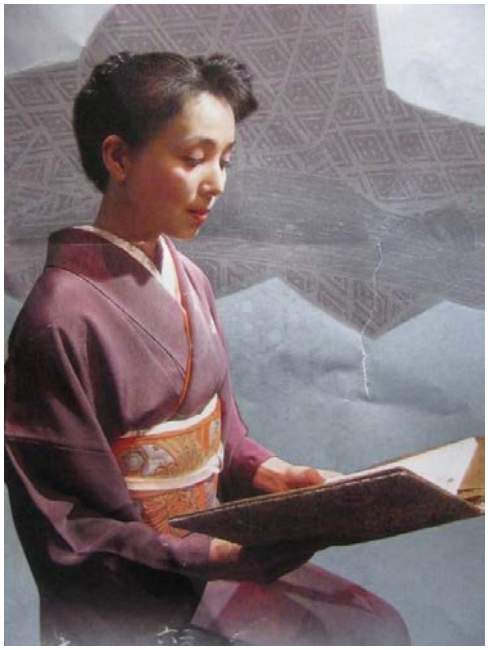
**第十三帖「明石」のあらすじ**

この日は第十三帖「明石」である。前回の「須磨」に続く流人生活第二弾といったところである。チラシに書かれているあらすじを引用しておこう。

「須磨の嵐は止まず、また京の天候も荒れ、政治も滞るほどだという。源氏の邸は高潮に襲われ、住吉の神に願いをたてるが落雷を受け一部が焼けた。その夜の夢枕に亡き桐壺院が現われ、住吉の神の導きで須磨を去れと告げる。翌朝神のお告げを受けたという明石入道が迎えに来、源氏はその船で明石へと移った。入道は源氏を手厚くもてなし、折にふれ娘の所在を口にする。初夏の一夜、源氏は、入道のかねてからの願いであった「娘の婿に」と強く望む気持ちを打ち明けられ、躊躇する娘に文を送る。

一方京では、朱雀帝が桐壺院を夢に見て以来眼病を患い弘徽殿大后も病に伏せり、太政大臣は亡くなるという凶事が続き、帝は桐壺院の遺言に従わなかった為と源氏の召還を考える。

秋、源氏は入道の娘と契りを結ぶが、娘は身分の違いに思い悩む。明けて七月、源氏召還の宣旨が下る。折から懐妊中の明石の君と別れを惜しみ帰京した源氏は、権大納言に任ぜられ、故院の冥福を祈り法華八講を催す準備をする。」



**供人たちの嘆き**

前帖から続く荒れ狂う大嵐の描写がすさましい。屋根も屏風も垣根もすっ飛び、落雷で邸の回廊が焼け落ちるありさまが迫力のある筆致で描かれる。

色恋沙汰を超越したこうした描写が物語りにリアリテイを与えるのである。

罪人である源氏は別としても、こうしたうらぶれた漁村に主人の源氏に従ってきた供人たちは、自らの運命を大いに恨んだことであろう。主人の罪が許されない限り、彼らもその地で源氏と運命をともにせざるをえないのである。

京には家族も親も知人友人すべてを残してきている。主人の源氏は、破壊されてしまった須磨の邸を逃れて、明石入道の豪華な屋敷に移り住むことが出来たが、供人や家来たちは邸を修復してそこに住まなければならない。

物語にそうした入念な描写があるわけではないが、彼らの嘆き悲しむ様がちらりと描かれているのはさすがである。

ましてや源氏はその地の太守である明石入道の世話で、贅沢なもてなしを受け、

入道の箱入り娘を意のままにすることも出来るのであるが、供人たちは女にありつくこともできず、ひたすらに京に残してきた妻や恋人たちを偲んで溜息をつくだけの日々を強要される。

視点の差で物語の背景はどのようにも変わるしまた変えることが出来るのである。

**紫の上の苦悩**

さてここで、男女の機微に触れて面白いのは、明石の君に近付こうとする源氏が、京に残してきた恋女房ともいうべき紫の上に思いを馳せる場面であろう。

数知れぬ色恋に身をやつしてきた源氏でも、罪の意識を感じるのである。黙っていれば京に知れることはまずないのであるから、知らぬ振りをして頂いてしまえ、というふてぶてしさはない。

むしろ、今まで以上に紫の上を恋しく思い、いっそのことここへ連れてくればよかった、とさえ思う。出張したり転勤したりして家族と離れ離れになったことを良いことに、しれっと浮気して悦に入る現代サラリーマン諸氏とは大分趣きが違う。

しかし、一度こうなってしまったからには、見栄も外見もかなぐり捨てて明石の君の元に通う熱心さは、色恋を生き甲斐とする精力絶倫男光源氏の面目躍如たるものがある。

さらには京の紫の上に自らの情事を告白して憚らない。現代であれば離婚騒動に発展するところであるが、紫の上は源氏の告白を受け入れる。

平安時代であったからそれが可能であった、と単純に受け止めてはならない。紫の上の気持ちに変化が無いはずはない。彼女は、悲しく、苦しく、死ぬほど辛いはずである。女心の機微は現代と変わるところはなく、作者紫式部はこれまでの帖の

中で、女心の揺れ動く様を生々しくまた生き生きと描いてきたことを我々は知っている。

紫の上は、どのようなことが起ころうとも源氏を深く愛し信頼しているのである。その信頼の中には、源氏がこれまで愛した女を打ち捨てるようなことは決してなく、徹底して面倒をみようとする男としての誠実さへの感動があると思わざるをえない。

もし、源氏が女を次から次に乗り換えるだけのカサノヴァ的色男に過ぎないのであれば、『源氏物語』は現代まで読み継がれる古典として残っていたはずはない。光源氏という人物を作者紫式部が細心の注意を払って造形した文学としての深さが、物語への共感と感動を誘うのである。

**顔を見ようとしない交わり**

文学の話から一転してシモネタに堕して恐縮であるが、抱き続けていた一つの疑問について考えてみたい。

平安時代の男女の交合は現代とよほど趣きを異にしていたのではなかろうか。

煌々とした月明かりの中でふと見つめ合う偶然でもない限り、臥所でお互いの顔を確かめ合うという習慣が無かったらしいことが様々な叙述で明らかである。真っ暗闇の中で互いに下半身をまさぐり合い結合して果てる、というだけの逢瀬であったのであろうか？

事が終わった後お互いに睦言を語り合い、様々な会話を交わしたはずであるが、顔を確かめるということをしていない。源氏は明石の君と何度も臥所を共にしていながら、白昼に顔を見合わして初めてその美形であることを確認する場面が描かれるが、もしかすると、当時は相手の顔を見ないということが暗黙のルールと

してあったのかもしれない。

相手のたおやかな仕草が気に入り、また抱き具合さえ良ければ、顔などどうでもよかったというわけではないことは、明石の顔を見て惚れ直し京へ連れて行こうと源氏が決意することで明らかである。

やはり美形であることは条件でもあったと思われる。現代では、顔を見ないで交わるということが一種の侮辱であることは確かだとしても、最終的には顔ではないことに変わりはない。顔を確認しないで交わるという平安時代の風習はそれなりに意味のあることであったのかもしれない。

さて、語り部山下さんの足首の骨折と何ら関わりがないとしても、その帰り肘に怪我をしてしまったことを告白しておかなければならない。

公演終了後、参加自由会費制の打ち上げという形で、階下の喫茶室でしたたかにワインをいただいて帰路につき、地元の駅から自転車で自宅に向かう折、自転車のペタルに載せた皮底の雪駄がつるりと滑りバランスを崩して横倒れしてしまった。

右肘をしたたかにコンクリートの地面に打ち付け、三箇所に傷を負ったが、その一つは穴が空くように抉り取られており、今でも通院せざるを得ないていたらくである。雪駄履きで坂道のペタルを踏むなぞどう考えても馬鹿げている。 これで何かの憑き物が落ちるようであれば、それもまた善しである。

# 画家・醍醐イサムの人と作品

<< 作成日時 : 2011/07/10 22:34 >>

2011年7月10日

**紀伊国屋画廊**

去る7日、新宿紀伊国屋画廊で醍醐イサム氏の個展が幕開けした。

毎年ほぼ同じ時期にこの場所で個展を行っている。ここは貸し画廊ではないので、画廊主催による企画展ということになる。書店としては日本一有名な紀伊国屋書店の三階に位置する絶好の場所なのである。

私は店でランチの後片付けをして、お祝い用のスペインワインをバッグに忍ばせ会場に向かったのであるが、すでに6時を過ぎていた。

オープニングは5時からであったので、会場はすでにアルコールの入った紙コップを手にした客たちで賑わっていた。会場に向かう道筋で、絵を観終わったと思われる顔見知りの人たち幾人かと擦れ違った。

**芸術は人と作品の合体**

醍醐イサムのフアンは多く、彼の個展には必ず駆けつけるといういわゆる「追っかけ」は数知れず、実は私もその一人と言っていい。従って、顔を見知った人たちが会場には少なからず居た。

フアンが多いのは、絵に人を惹き付ける力があるというのが最大の理由であることは疑いえないが、彼の人間的魅力も作品に勝るとも劣らない要因といえる。

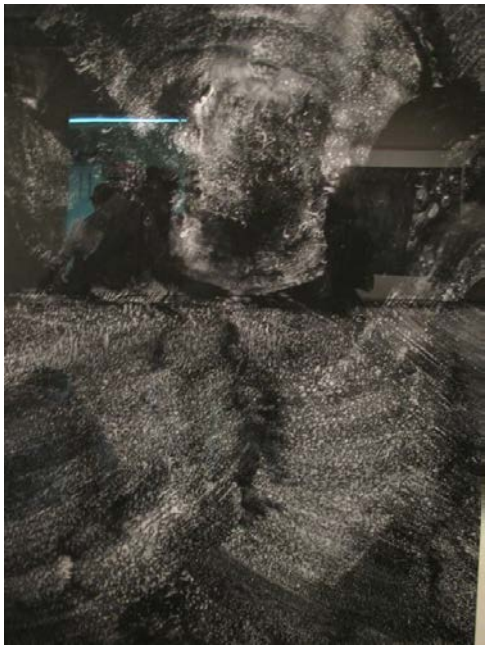
芸術家は作品が全てであると言ってしまうことも出来るが、その人の人間としての生き様や伝説が作品の表情を深めるということがある。芸術というのは、人と作品が合体して醸し出す何かなのである。

もはや現代美術に携わる人たちがその名を知らないはずがない、と思われるほどに彼は毎月のようにどこかの画廊で個展を開催している。その多くは貸し画廊であるが、彼の個展は画廊の企画であるので、お金を払って個展を行っているわけではない。

しかし、何十年も前から号一万円を下らない値が付いているので中々買い手は現われない。未だに彼が生計のためのアルバイトをしているという噂を聞くのも無

理からぬことであるように思われるのである。

　油絵でも30号30万円という値は、中堅画家でも難しいところである。ところが、彼の絵は基本的には墨絵であり単色である。本人の口から聞いたわけではないが、油なら最低でも一週間はかかる号数の絵は、考えようによっては数時間で出来てしまう（と思われても仕方ないほど）黒の顔料を刷毛でスーッと幾度かなぞったに過ぎないような作品が大半なのだ。



**鑑賞者によって変わる作品の表情**

完全な抽象であるが見方によってはどのようにも解釈できる図柄となっている。本人が最終の図柄を完全に頭に描いて仕上げた作品ではないだけに、観る人間の想像力を際限なく掻き立てる。

抽象で最も作者の本領が発揮されるのは、想像力というより思い切りと決断力、そして何よりも、芸術表現者としての、人間としての、感性の豊かさと思考の深さである。

薄っぺらい思考しか持ちえない人、感性に磨きがかかっていない人は、抽象絵画には向いていない。思考と感性に、狂気とも思われる理不尽で不条理で理解を拒む要素を孕んでいて初めて、表現が一つの独自な形を取るのだ。 解りやすい抽象、解りやすい表現というのはもともと芸術とは無縁なのである。その点醍醐氏の作品は、解りやすいとはとてもいえないので、まずゲイジュツ作品の様相を呈している。

しかし鑑賞する人がその次元に止まっていたのでは、作品は、作品という名のモノでしかない。私に言わせれば、彼の作品は鑑賞する人の次元によってその表情を変えるのである。

「カニは自らの甲羅の大きさに合わせて穴を掘る」といわれる格言があるが、醍醐氏の絵に接する人は自らの思考と感性を試されているようなところがある。大きくて深くそして揺るぎがないのである。

**作品の冷酷さと優しさ**

彼と知り合ったのは25年ほど前であるが、そのころから作品の作り方は本質的に変わっていない。むろん表現の深さは無限の多様性を持っているが、描かれる対象は濃淡を使い分けた刷毛による墨、ただ内面の表象というしかない図柄のみである。

私にとっては文字にし易い図柄(文学的にして内面的)といえるので、彼の絵を前にして詩即興朗唱を試みる機会を何度も持つことが出来た。彼の絵は私の内面性に呼応して気安く反応してくれるのである。

私の内面と思索を語ることが、即彼の絵の説明ないし深奥の感性と連携していることを確信できるのだ。

私が親しく付き合う何人かの作家もそうであるが、どんな抽象でも優れた作品は作家の思索と感性を強烈に放っている。それが私の思索と感性に触れ合うことが出来れば、私は自分を語るだけでいいのである。

醍醐さんの絵はまさにその筆頭といってもよい。一見人を突き放しているかに見える白黒の作品は、彼の他人に対する気持ちの行き届いた心配りと優しさに裏打ちされており、観る人たちを決して突き放すことがない。むしろ「おいでおいで」と引き寄せる。 墨だけの表現がむしろ暖かさと優しさにふんわりとくるまれているのだ。

だからといって、作品は決して見る側に擦り寄っているわけではない。むしろその反対である。場合によっては、観る人間を拒絶し混乱させ突き放す。作品は呼吸し疾走を停止し退行する。その瞬間を捉えるところに醍醐作品の魅力があると私は思っている。

会場閉鎖後、20人ほどのフアンと共に付近の居酒屋に向かう。客に私と醍醐氏

の古くからの共通の知人が逗子から訪れていて、大いに旧交を温めた次第である。